

暴力革命とプロ独

マルクス主義・レーニン主義・スターリン主義

——革共同の総括のために——

請戸耕市

(革共同再建協議会 2020年11月×日)

目次

【まとめ】	2
【I】 本多「継承か・解体か」	13
【II】 修正主義論争とドイツ革命	18
【III】 現実の変化・労働者の変化	22
【IV】 マルクス主義の欠陥	29
【V】 レーニンからスターリンへ	37
【VI】 もう一つの道：アソシエーション	48

【まとめ】

(1) 結論・骨子

- ① 本多「継承か解体か」は、革共同のスターリン主義回帰の転回点。「継承か解体か」は、マルクス主義の欠陥、レーニン主義・スターリン主義の問題性について全く無自覚・無批判であり、その誤謬を継承するものと言わざるをえない。革共同の「反スタ」は、ソ連共産党の一国主義に世界革命を、日本共産党の平和革命論に暴力革命論を対置した以上ではなかった。
- ② 暴力革命論・プロ独論は、資本主義社会における経済的・政治的支配の特徴をまったく把握できない次元で、その原理において間違った革命論である。
- ③ 資本主義社会の支配の特徴は、物象化である。生産関係の物象化によって、物象による支配・物象への隷属という徹底される点である。そして、物象化を土台に国家への国民統合として行われる点である。
- ④ マルクスは、『宣言』と1848年革命敗北の総括の上に、『資本論』において決定的に飛躍・転換した。『資本論』は、資本主義を物象のシステムとして把握したものである。
- ⑤ マルクス主義とは、エンゲルスに創始されたものだ。マルクス『資本論』とは体系が決定的に異なる。マルクス主義は重大な欠陥を抱えていた。物象の支配する世界を把握できず、単線的な革命論で現実から乖離した。そのために破産と修正を不可避とした。ベル

ンシュタインの修正は、マルクス主義の欠陥を指摘したが、現状追認的にマルクスもマルクス主義も破棄するものだった。

⑥ レーニンとは、マルクス主義を原理論として確認しつつ、現実論としては、外部注入論という修正を行った。そのことによって、革命ロシアにおいて、不断に発生する商品関係・物象関係——レーニンは「習慣の力」と呼んで敵視——を、党の命令と国家の暴力の力をもって絶滅する闘争を強行することになった。

⑦ スターリンは、レーニンの言説と行為を愚直に継承・遂行しただけだ。新しい内容はほとんど付け加えていない。スターリン主義は、マルクス主義の欠陥、レーニン主義による外部注入論、そして商品・物象関係の暴力的な絶滅戦をもって形成され・発生した。

⑧ マルクス主義・レーニン主義・スターリン主義とは違うもう一つの変革の道が存在し・存在する。物象のシステムを解明した『資本論』は、現実の矛盾した存立構造のうちに、アソシエーションが対立的に形成されていることを喝破した。

⑨ 19世紀後半、自由主義・夜警国家の下で、コモン(アソシエーションの具体的析出)への死活的な要求・取り組みが沸き起こった。しかし、20世紀、ケインズ主義・福祉国家・フォードイズムの下で、広がったコモンを国家・資本が吸収・制度化、社会運動は後退した。しかし、21世紀、新自由主義・福祉国家解体・グローバル化の下で、コモンの解体か再生かをめぐる死活的な要求・取り組みが起こっている。社会運動が隆盛するしかない。

(2) キーワード解説

●マルクス主義とは

▼『共産党宣言』に集約された革命論的結論は次の2点——

- ◇資本主義の崩壊と階級闘争の激化は不可避
- ◇ブルジョアジーとプロレタリアートの全面对峙と暴力的打倒

・この結論を維持・継承するのが正統派・伝統的なマルクス主義

▼正統派、伝統的なマルクス主義とは

・エンゲルス、ルクセンブルク、カウツキー、レーニン、スターリン……、革共同も…

▼マルクス主義の原型はエンゲルスの創始

・マルクス・エンゲルスの『共産党宣言』、マルクス『経済学批判』「序言」の「公式」を土台に、

・エンゲルスが、マルクスの言説をエンゲルス流に整理・解釈

・後期エンゲルス『空想から科学へ』『フォイエルバッハ論』で確立

▼マルクスの考え・とくにマルクス『資本論』とは決定的に相違

▼マルクス主義は大きな欠陥。故にその破産と修正は不可避だった。

・ベルンシュタインの修正主義も、レーニンの外部注入論も修正

●『資本論』とは(1)

▼『資本論』とは何よりも物象化論

◇資本主義とは、

・物象(商品・貨幣・資本など)のシステムである、

・生産関係が物象化されている社会である、

・人間ではなく、物象が主体化した社会である、————ということを解明

▼エンゲルスは唯物史観。マルクスは物象化論

●物象化とは・生産関係の物象化とは

◇生産は、本来的に、人間と自然の関係、および人間と人間の関係

↓

◇ところが、資本主義では

- ・人間の能力・関係・普遍性などが、物象に移ってしまって、物象(商品・貨幣・資本など)が、生産の主人公になってしまい、物象が、勝手に生産関係を動かしている。
- ・主体であるはずの人間は、物象に引きずりまわされる、みすぼらしい存在に落とされている。

—これが物象化。

◇さらに、物象化は、

- ・自然環境にたいする破壊、および女性の身体・労働・能力・欲求への破壊・抑圧の原因である。

◇資本主義とは、物象のシステム(生産関係の物象化と物象による支配)である。

●『資本論』とは(2)

▼『資本論』は、物象化論の大枠の下で—

- ・搾取論 人間と人間の関係
- ・物質代謝論 人間と自然の関係
- ・それにたいして、マルクス主義は、物象化論抜きに、搾取論一辺倒

▼『資本論』は、『宣言』と1848年革命敗北の総括の上に飛躍・転換

- ・転換を明確にした『資本論』
- ・『宣言』の次元を超えられないマルクス主義

▼資本主義以前と資本主義では、物象化という点で、支配のあり方が違う

- ・このことを明確に把握した『資本論』
- ・このことを明確にする以前の『宣言』

▼マルクス主義の体系とマルクス『資本論』の体系とはパラダイムが違う

●階級対立とは

▼マルクス主義は

- ・階級対立を、資本主義社会の主要な矛盾と主張。
- ・プロレタリアートが、資本主義と階級闘争の発展過程をつうじて、必然的に、階級的に自覚し革命的階級に成長すると想定した。

▼しかし、マルクスの『資本論』・物象化論に踏まえれば

◇階級対立とは

- ・資本という物象と、労働力という物象との対立。
- ・それが、資本家という人格と賃労働者という人格の対立として現象したもの。
- ・階級対立の基礎に、物象のシステムがある。物象化によって、眞の主体でありながら個別化・客体化された人間と、自立化・主体化した物象とが対立している。

◇したがって、重要なことは、階級対立がどこまで激化しても、それ自体では、物象のシステムの枠内を超えることはない。その限りでレーニンの指摘はその通り。

- ・マルクス主義の階級闘争激化→革命論は原理的な間違い

●資本主義における支配とは

▼経済的支配は

◇資本主義以前では、

- ・特定の支配者が支配し、被支配はその支配者に隷属する、という人格的な支配・隷属関係であるのにたいして――

◇資本主義では

- ・経済的支配は人格的性格を持っていない。
- ・個々の賃労働者は、特定の資本家に人格的に従属していない。
- ・特定の人格が支配するのではなく、物象が諸個人(賃労働者も資本家も)を支配・隷属する。

◇資本家も賃労働者も、物象のシステムの中で、物象に引きずり回され、価値増殖過程に放り込まれ、搾取し・搾取される。

▼政治支配は

◇資本主義以前では、

- ・経済的支配と政治的支配は不可分一体、政治的権力関係は同時に経済的搾取関係。
- ・経済的支配者は、同時に、司法的・政治的・軍事的に支配。
- ・支配者と被支配者は、法権利的に不平等。しかし——

◇資本主義では、

- ・経済的搾取と政治的支配は分離している。
- ・土地や生産手段の所有者は、この所有に結びついた支配機能を持たない。
- ・国家は、ブルジョアジーがプロレタリアートを支配・抑圧する装置ではない。
- ・国家は、社会の上にそびえ立つ力として、私的所有という秩序を護持する。
- ・国家は、諸個人(賃労働者も資本家も)を、自由で平等な私的所有者として取り扱い、諸個人が、私的所有者としてふるまうことを保証する。
- ・ただし、それは、諸個人が、私的所有者としてふるまい、他者を私的所有者として承認する限りであり、私的所有の侵害者は暴力で排除する。そのために、自立的で独立的な力が有する¹。

◇資本主義の経済的・政治的支配は、特定的人格が、他の諸個人や集団に権力を行使し支配する、という旧来のあり方からの決定的な転換である²。

¹ マルクスは、「経済学批判」と並んで「政治学批判」として国家論を展開することを構想していたが、果たせなかった。ただ、最初期の「ヘーゲル国法論批判」や『資本論』・物象化論に踏まえれば、「政治学批判」・国家論は、行論のような骨格になるだろう。それは、エンゲルスやレーニンのそれとはまったく異なる内容であることは明らか。

² フーコー、ブルデューの指摘に、その限り通底する。しかし、彼らは、なぜそうなるのかということをもまったくつかめていない。物象化という資本主義特有の現象を把握していないからである。

● 存立する矛盾とは

◇マルクスの矛盾論をとらえることが、マルクス主義を根本的に乗り越える上で、またアソシエーション論をつかむ上でカギをなす。

◇[対立と統一との矛盾的統一]

・資本主義社会では、物象化によって、真の主体でありながら個別化・客体化された人間と、自立化・主体化した物象とが対立。同時に、賃労働と資本とが、対立しつつ互いに相手の存在なしには存立できないものとして、現実的な統一が不断に形成されている。

◇存立する矛盾とは、

・[対立と統一との矛盾的統一]という矛盾故に、資本主義社会が存立しているという把握であり、それ故に、資本主義社会は、その深層において、人間(労働する諸個人)こそを主体としたソシエーション(人間を主体とした連関)が対立的形態で潜在している。同時にそれ故にその矛盾を不断に顕在化させ、新しい社会への転化を要請している、という把握である。

◇新しい社会の現実的な形態が、コモンを析出・顕在化させている。これを意識的積極的に顕在化させていくことが、21世紀の社会運動の役割である。

・マルクスは、この矛盾論を、最初期の『ヘーゲル国法論批判』で確立し、曲折を経て、『資本論』において、全面的に展開した。

●マルクス主義とマルクス『資本論』の体系的相違

マルクス主義	マルクス『資本論』
<ul style="list-style-type: none"> ・唯物史観 ・搾取、階級対立、階級闘争の一辺倒 	<ul style="list-style-type: none"> ・物象化論 ・階級対立は物象と物象の対立 ・階級対立の基礎には、物象のシステム
<ul style="list-style-type: none"> ・唯物史観を科学にする経済学＝『資本論』 ・剰余価値論を解明した『資本論』 ・物象化論なき単なる経済学、ただの剰余価値論 ・科学という名の素朴実証主義 	<ul style="list-style-type: none"> ・『資本論』は物象化論を解明
<ul style="list-style-type: none"> ・目的論・理想論としての共産主義 	<ul style="list-style-type: none"> ・現実＝存立する矛盾のうちに、対立的に形成されている共産主義
<ul style="list-style-type: none"> ・資本主義の崩壊と階級闘争の激化は不可避、ブルジョアジーとプロレタリアートの全面対峙と暴力的打倒で決着 ・物象の支配する世界を把握しないがゆえに単線的で平板な革命論 	<ul style="list-style-type: none"> ・〈資本主義の崩壊と階級闘争の激化→革命〉とは行かない。 ・物象的連関の世界は、そこにアソシエーションを対立的に潜在させている。 ・潜在するものを顕在させていくのが社会運動

●修正主義論争とは

・1890年代、ドイツ社会民主党内において、マルクス主義の原則にたいして修正・破棄を求める意見が提出され、それをめぐる論争。

・修正主義の主唱者はベルンシュタイン。その批判者はカウツキー、ルクセンブルクなど。

▼問題はなぜ原則の修正が問題になったのか—

〔A〕客体的原因：現実の変化・労働者の変化

・資本主義以前の社会から、資本主義の社会へ

・大衆社会の出現＝物象による支配、物象への従属

・近代国家への国民としての統合

〔B〕主体的原因：マルクス主義自体の欠陥→現実との乖離

・〔A〕現実の変化・労働者の変化だけではない。

・問題は、現実の変化によって現実と乖離し、マルクス主義の欠陥が露見

▼〔A：現実の変化〕×〔B：マルクス主義の欠陥〕にたいする態度

◇ベルンシュタインの修正主義

・「崩壊・革命論に反対。民主主義の拡大と市民社会の普遍化」

◇カウツキーの修正

・「社会革命は漸進的」「社会主義意識は外部から」

◇ルクセンブルクの原則維持

- ・「問題は革命か・改良か。改良は革命という大目標に従属する」

◇レーニンの修正

- ・「社会民主主義的意識 [共産主義] は外部からしかもたらしえない」

●レーニン主義とは

▼外部注入論という修正

◇直面した問題

- ・〔A：現実の変化〕×〔B：マルクス主義自体の欠陥→現実との乖離〕にたいして、

◇レーニンは、

- ・マルクス主義の大棒（資本主義の崩壊と階級闘争の激化は不可避、ブルジョアジーとプロレタリアートの全面对峙と暴力的打倒）を原理論として確認しつつ、
- ・しかし、「階級闘争の進展によって、階級意識が形成され、やがて革命的意識に発展する」というマルクス主義の想定を否定し、

- ・労働者は、社会民主主義[共産主義]的意識を持ってない。
- ・自然発生的には組合主義
- ・ブルジョアジーによる思想的奴隷化にしかない。
- ・社会民主主義的意識は外部から注入するものだ。
- ・自然発生性にたいする闘争ことが社会民主主義者の任務。
- ・中央集権と厳格な規律に、革命の目的意識性が貫かれる。

——という修正を加えた。

・レーニンにとって、目的意識性・中央集権制・規律を、ほとんど共産主義と同等の位置・内容に高めている。

・これは、現実に掉を指して流されただけのベルンシュタイン的な修正とは真逆で、現実にたいして逆ねじを食わずような修正だが、小さくない修正。

▼しかし直面した問題は解決しない

◇外部注入論は——

- ・〔A：現実の変化〕×〔B：マルクス主義自体の欠陥〕にたいして、
- ・現実の変化・労働者の変化、それを規定する物象化という問題を対象化するのではなく、
- ・また、物象化を対象化できないマルクス主義の欠陥を問題にするのでもなく、
- ・労働者にたいして、「外部」から、主意主義（意志の力）的に働きかけることでもって、変えることができる、という考え方。

▼スターリン主義への一里塚

◇外部注入論は、

・革命後、レーニンとスターリンの下で強行された、商品・物象関係にたいする暴力的粉砕闘争の組織論的な原点。

●スターリン主義とは

▼一般的に、スターリン主義とは一

・一般には以下の諸点の特徴をもって説明されている。

(1)一國社会主義 (2)一党制とプロレタリア独裁 (3)一枚岩主義 (4)大国民主義
(5)社民主要打撃論、社会ファシズム論 【コトバンク/小学館・日本大百科全書/志田 昇】

・各論としてはその通りだが、しかし……

▼ではスターリン主義とは、核心的には

◇資本主義＝物象のシステム＝商品関係を、党と国家の命令と暴力をもって絶滅・一掃する——という考え、それを実践する政策・運動。そういう考え・運動を社会主義と称する理論

◇ i. 資本主義社会の支配の変化、労働者の物象的隷属と国民国家への統合という中で、また、 ii. マルクス主義の欠陥が露見する中で、 iii. レーニンによって、外部注入論というマルクス主義の修正が行われ、 iv. 革命ロシアにおいて、不断に発生する商品関係にたいする絶滅戦を強行し、スターリン主義が形成・発生した。

◇したがって、マルクス主義の欠陥が、スターリン主義の土台的な原因。レーニン主義は、その直接的な原因。

(3) 議論の構え

- 暴力革命・プロ独は破産したから、アソシエーションで行こう——ではダメ
・パラダイムの乗り移りでは、問題を真に乗り越えることはできない。
- 当時に現在をぶつけてもダメ
・その時代状況に迫った総括が必要。
・当時の革命家たちが直面した問題をつかむ。
- レーニンが悪い、エンゲルスはトンチンカン、本多延嘉もヒドイ——ではダメ
・もはや歴史上の人物。問われているのは現在の我々
・レーニンの時代からもはや100年
・本多延嘉の時代から50年
・いまだに総括・乗り越え・決別を明確にできていない我々
- しかしまた、20世紀の負の歴史を通して、マルクス主義・レーニン主義・スターリン主義の欠陥と破産を経験したからこそ、そして、それを総括すればこそ、21世紀の展望を語ることもできる。

【 I 】 本多「継承か・解体か」

——暴力革命論・プロ独論を中心に

■ 本多延嘉「レーニン主義の継承か 解体か」暴力革命論・プロ独論関連／要旨

【本質的にも現実的にも暴力革命】

・プロレタリア革命は本質的にも現実的にも暴力革命としてのみ実現できる。プロレタリア革命は、暴力革命としての本質を必ず貫徹されなくてはならない。

【暴力革命の目的意識性】

・プロレタリア革命の特徴は目的意識性にある。暴力革命の目的意識的な貫徹だけが真に勝利をもたらす。

・パリ・コンミュンの敗北、ロシア革命の勝利、ドイツ革命の敗北の教訓はそのことを示している。

・プロレタリア革命の目的意識性は、前衛党の蜂起の計画的・系統的な準備として問われる。

・ソビエトはプロレタリア独裁権力の萌芽ではあるが、前衛党の目的意識的な指導なしにはプロレタリア独裁のための階級的な国家組織にはならない。

【国家の本質規定：ブルジョア支配のための政治的暴力】

・ブルジョア国家の本質は政治的暴力。国家の政治的暴力とは、暴力の資本制的疎外形態であり、プロレタリアートと被抑圧諸階級・諸階層にたいするブルジョアジーの支配を、「社会の共同利害」の実現であるかのように総括するもの。

・国家を「共同幻想」ととらえるのは、国家の暴力論的・権力論的規定を捨象する小ブル観念論。それは、マルクス『ドイツ・イデオロギー』の「虚偽の共同性」「共同体の幻想的形態」という規定を、政治的暴力と対立するかのようにとらえる誤謬。

【暴力の本質規定：共同体の対立的表現】

・暴力の本質は、共同体の対立的表現、対立的に表現されたところの共同性である。

・暴力と共同性の内的構造は、(1)共同意志の形成過程と強制過程の二つの契機の一、(2)内部規範と外部対抗の二つの要素の統一、ということである。

【暴力革命の必然性の根拠】

i. 全人間的・全社会的な解放 ii. 賃労働と資本の矛盾 iii. 過渡期における内戦とプロレタリア独裁 iv. 共同性と主体性の回復 v. 目的意識的性

【プロレタリア独裁の規定：暴力革命に絶対的に立脚した権力】

・プロレタリア独裁とは、資本主義社会から共産主義社会への世界史的な過渡期に照応した革命的な国家であり、国家消滅の過渡的な国家形態。

・その本質は、〈支配階級として組織されたプロレタリアート〉、〈ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの革命的暴力によってたたかかれ、維持されている権力〉、〈暴力革命に絶対的に立脚した権力〉である。

【独裁とは誰が独裁するかの問題】

・独裁とは、国家の階級の本質にかかわる規定。民主主義とは、独裁を実現する統治形態にかかわる規定。だから、階級闘争が国家の壁につきあたったとき、解決を要求される課題は、あくまでも誰が独裁するのかという暴力的決着であって、民主主義の防衛の問題ではない。

【ブルジョア民主主義の形式性】

・ブルジョア民主主義は、どんなに徹底した形態をとろうとも、それはかならずブルジョア独裁を維持するために有効であるそのかぎりにおいてのみ評されるものである。

・ブルジョア民主主義の矛盾とその破綻の表現である内乱状態を止揚するためには、プロレタリア独裁の鉄の権威と、そのもとへの国民の統一が絶対に不可避。この道だけが、ブルジョア民主主義の矛盾とその破綻を根底的に解決し、プロレタリアート人民に真実の民主主義を与えることが可能なのである。

【プロレタリア独裁の組織形態】

i. 武装したプロレタリアートが絶対的条件 ii. 執行府・立法府でもある行動的団体 iii. 公務員の選挙制と解任制 iv. 「労働者なみ」の俸給

【プロレタリア独裁の歴史的任務・政策的項目】

i. 革命的暴力によるブルジョアジーの抑圧 ii. 内乱・革命戦争の完遂 iii. 農民・勤労諸階級との同盟 iv. 民族抑圧・社会差別とのたたかい v. ブルジョア専門家への奉仕の強制 vi. プロレタリアートの能力と規律の培養

【社会主義とは価値法則の廃絶】

・社会主義とは、経済学的に規定するならば、労働力の商品化の廃絶、価値法則の廃絶
・スターリン主義者のように、価値法則は利用されると考えたりするのは、経済学のイロハ的な誤り

・過渡期におけるプロレタリア権力の任務は、(1)あくまでも、世界革命を完遂し、(2)プロレタリア独裁をますます強化し、この二つの任務にかたく結びつけて、(3)社会主義的組織化をできるだけおしすすめることにある。

●特徴は暴力革命論・プロ独論で徹底

- ・暴力革命論・プロレタリア独裁論で徹底している。
- ・暴力革命論・プロレタリア独裁論の核心を貫くものが、目的意識性だと強調している。

- ・国家の本質は、ブルジョアジーがプロレタリアートを支配・抑圧するための政治的暴力であると規定している。
- ・暴力を、共同体の対立的表現として、積極的・肯定的に確認している。
- ・資本主義社会はブルジョア独裁、それをプロレタリア独裁に置き変えるのがプロレタリア革命としている。
- ・社会主義とは価値法則の廃絶であり、それがプロレタリア独裁の任務としている。

●原理的な誤り・マルクス主義の欠陥を継承

- ・しかし、これは、原理的な誤りである。
- ・資本主義社会の支配のあり方の特徴をまったく把握できていない。
- ・マルクス主義の欠陥そのものを継承している。 → 【Ⅲ】【Ⅳ】

●レーニン主義・スターリン主義の轍

▼目的意識性の強調

- ・目的意識性の強調は、レーニンの外部注入—プロ独—党の独裁—商品関係絶滅戦—スターリン主義という道を後追いするものである。
- ・マルクス主義の欠陥にたいする全くの無自覚であり、
- ・かつレーニン主義・スターリン主義の問題性について、無関心である。

▼レーニン・スターリンの独裁論

- ・ブルジョア独裁をプロレタリア独裁に置き換える論は、一見わかりやすいが、資本主義社会の支配のあり方の特徴をまったく把握できていない。
- ・プロ独の本質論は、外部注入—目的意識性—党の独裁というレーニン—スターリンの規定そのままである。
- ・プロ独の政策内容は、革命的暴力でブルジョアジーの抵抗を粉碎・抑圧する、という以上の内容がない。

▼「社会主義とは価値法則の廃絶」

- ・プロ独論の政策内容の貧困さに故に、「価値法則の廃絶」論が逆に目立つ。
- ・「価値法則の廃絶」それ自体はまちがいでない。
- ・しかし、問題にすべきは、ソビエト下で〈なぜ価値法則が貫徹し続けたのか〉である。
- ・それは、「経済学のイロハの無理解」などと一笑にふせられるような問題ではない。
- ・「価値法則」=商品関係は、党の指令や国家の政策・暴力では廃絶できない。それを農民らにたいする流血の絶滅戦として強行したところに、レーニン主義の本質的破産があり、スターリン主義の直接の発生根拠がある。

●暴力の自立化とその自己目的化

◇（本多著作選2巻で）暴力論に関して新たな提起をしたとしている。

・しかし、エンゲルス『反デューリング論』『歴史における暴力の役割』（全集21巻）の暴力論の継承以上ではない。むしろエンゲルスの問題性を拡大している。

◇マルクスが、暴力の抑圧的な面を強調してきたのにたいして、

・エンゲルスは、民衆の側の暴力が、その共同性・集合力の発露という側面をもっていと示唆した。

▼暴力とは物理的強制

◇そもそも暴力とは、

・政治ないし意志の他者にたいする物理的強制と定義できる。

・重要なのは、政治・意志の内容とその是非である。

・したがって、共産主義・人間解放とは、果たして、他者にたいして、物理的に強制する必要があるような内容なのか、ということが問題になる。

・つまり、〈人格ではなく物象による支配・隷属〉という資本主義の支配の問題であり、〈資本主義の中で対立的に形成されている共産主義〉という把握の問題である。このように把握するならば、物理的強制とは相容れない。

▼暴力の自立化とその自己目的化

◇しかも、エンゲルスの示唆を、本多がより積極的に提起しているのは

・〈暴力が激化すれば、共同性も高まる〉という論理である。

・本多の暴力論は、暴力の自立化とその自己目的化の論理を孕んでいる。

◇強大な構造的に暴力にたいする抵抗が、暴力性を持つのは当然であり不可避である。

・しかしそれは、共産主義・人間解放という政治内容に規定されてのものだ。

革命的暴力の中にプロレタリア革命の本質、その目的意識性を求めるのは、共産主義・人間解放という政治の本質的内容から外れていくものである。

◇なお、マルクス『資本論』の「暴力は助産婦」を、エンゲルスが引用し、本多も依拠しているが、

・マルクスは、資本主義の原始的蓄積過程における血の滴る暴力を告発する意味で、暴力をとりあげている。

・これを革命的暴力の歴史的役割に敷衍するのは、意図的な誤用である。

▼革マル派との党派闘争

・それ自体がスターリン主義の枠内のセクト主義的な争いであつたが——それを、革命的暴力として積極的に位置づけたことは、労働運動・大衆運動に深刻な打撃と破壊をもたらしたものとして痛苦に確認する。

● 革共同のスターリン主義回帰の転回点

◇以上の検討より、「継承か解体か」は、マルクス主義の欠陥、レーニン主義・スターリン主義の問題性について全く無自覚・無批判であり、その誤謬を継承するものと言わざるをえない。

・「継承か解体か」は、主に、レーニン『背教者カウツキー』『左翼空論主義』、スターリン『レーニン主義の基礎』が参照されていることがわかる。とくに明らかにスターリン『レーニン主義の基礎』に依拠した部分がある。

▼ 革共同の「反スタ」は

・端的に言えば、

・スターリンの「一国社会主義」論にたいして、世界革命論を
・日本共産党・六全協の平和革命論にたいして、暴力革命論を

——対置するもの。それ以上ではない。

・要するに所感派。もちろんそこには、戦後革命敗北の悔しさ・その乗り越えのバトスがあったのだが。

◇結論として、「継承か解体か」は、革共同のスターリン主義回帰の転回点であった。

【Ⅱ】 修正主義論争とドイツ革命

▼ドイツ革命への視角

◇一般に——少なくとも革命運動史上の議論の枠内では——ドイツ革命の問題は、ロシア革命との関連・対比で評価されてきた。

・しかし、歴史的に見れば、19世紀末から20世紀初頭のドイツでは、マルクス主義の大きな影響を誇り、世界最大のマルクス主義政党を擁し、エンゲルスの弟子たちが直に指導していた。

・ロシア革命があろうがなかろうが、マルクス主義の革命論の真価がドイツにおいてこそ問われた。

・しかし、敗北している。このことをどう総括するか、という問題を抜きにして、マルクス主義の革命論を評価することはできない。

●ドイツ革命敗北の総括—革共同の場合

◇本多「継承か解体か」によれば、1918年ドイツ革命の敗北は、以下のような問題であった。

■ 本多「継承か解体か」／要旨

・ドイツのプロレタリアートは、事実上すでにドイツの支配者。

・問題はただ、反革命を革命的暴力をもって粉砕しつつ、社民党と自由主義ブルジョアジーの同盟の手から労兵レーテに権力を奪取することを確認するだけ。

・しかし、革命的な翼の決定的な未成熟、社民党の圧倒的な指導力、という対照的な政治配置は、レーテをして「労働者をブルジョアジーに従属させる道具」に変質せしめた。

▼「問題はただ、権力奪取を確認するだけ」——だったのか？

◇まず、直接的な事実誤認。たしかに労働者・兵士においてはレーテが形成され、戦闘化した。行政機構はドイツ全域において、崩れることなく存続している。

◇本多「継承か解体か」のドイツ革命総括は、

・その持論である真の前衛党の不在、暴力革命と目的意識性の問題に総括を収斂させている。翻って言えば、暴力革命路線を目的意識的に貫く前衛党が存在しさえすれば、勝利できた——という意味であるが、安直ではないか？

◇問題はもっと根本的な次元ではないのか？

・1918年前後ないし1920年代前半に、誰がどういう戦略・戦術で闘ったのか・闘わなかったのか、という次元でもない。

・少なくとも、19世紀末に公然化する、マルクス主義革命論をめぐる修正主義論争において突き出された問題に大きな問題が提起されていたと思う。

●修正主義：エンゲルスとベルンシュタイン

◎修正主義論争という点、その代表格はベルンシュタインだが、その出発点は、エンゲルスにあるとみた方がいい。

・2人の主張を検討する。

▼エンゲルス「階級闘争の条件は変化。『宣言』は時代遅れ」

・エンゲルスはこれを執筆した半年後に没。「政治的遺書」といわれている。

■「フランスにおける階級闘争」序文（1895年）／要旨

・1848年革命当時の見解は誤りであり、幻想であった。

・プロレタリアートが闘争すべき条件を、すっかり変革してしまった。

・1848年以降の歴史は、48年革命当時追求した奇襲による社会改造ということが、いかに不可能であったかを証明した。

・解放の道具としての普通選挙権を利用して、党勢が急拡大した。

・1848年まで、最後の勝敗を決めていたバリケード戦は、時代遅れになった。

・階級闘争の諸条件も変化し、無自覚な大衆の先頭にたった自覚した少数者が遂行した革命の時代は過ぎ去った。

・党勢が漸進的に増強しているので、それを前哨戦で消耗させないで、決戦の日まで保持することが、われわれの主要な任務である。

▼ベルンシュタイン「崩壊・革命論に反対。

これからは民主主義拡大と市民社会の普遍化」

■「社会主義の諸前提と社会民主党の任務」（1899年）／要旨

・「ブルジョア社会崩壊→革命」論には反対である。

・「共産党宣言」の破局論はいまや時代錯誤である。

・エンゲルスが『フランスにおける階級闘争』序文（上掲）で述べている通り、奇襲戦の時代はもはや過去、衝突は党勢の着実な拡大を妨害するもの。当面の任務は、議会活動を気長に宣伝することである。

・社会民主党の目標は、労働者階級を政治的に組織し、民主主義の訓練をすること、国家制度を民主主義的内容での変革を求めて闘うことである。

・社会主義の究極目標と一般にいわれているものは、私にとって無である。

・民主主義は手段であると同時に目的である。それは社会主義をかちとる手段であると同時に社会主義を実現する形態でもある。

・プロレタリア独裁は時代遅れ。階級独裁はより低い文化に属するものである。

・社会民主党は、市民社会を解体してプロレタリア社会に置き換え、その構成員をすべてプロレタリア化させるということを意図しているわけではない。むしろ労働者をプロレタリアという社会的地位から市民の地位に高めるように努力しているのである。

・経済的自己責任の原理でさえ、私の見解では、社会主義の理論上否定しえない。職を見つける意志を持たない者までを国が扶養するよう要求することは行き過ぎである。

・「プロレタリアートはいかなる祖国も持たない」という『共産党宣言』の文章は、無権利で政治生活から排除されていた1840年代の労働者については正しかったのだが、今においては、その正しさの大部分は失われてしまっている。

・国民の利益が問題になっている場合には、国際主義は、外国の利害関係者の要求に譲歩をする理由は全くない。社会民主党が中国分割に反対したのは、全ドイツの利益にならなかったからである。ドイツ国民は、中国が他国の餌食にならないことに関心を持つ。そして中国問題についてドイツが決定的な発言力を持つことに関心をもつ。

◇ベルンシュタインの主張の当時の反響

・ベルンシュタインの見解は、唐突で孤立したものではなかった。数年来ドイツ社会民主党内で拡大してきた主張の公然化といえる。

・しかしまた、こぞって支持されたかというところでもない。カウツキーなどの原則墨守派の反発はわかるが、意外にも改良主義派も当惑した。というのも、改良主義派は、現場で改良主義を推進しながら、お題目としての革命的原則を掲げておきたかった。だから、ベルンシュタインはストレートに言いすぎだ、と。

●革命論と現実の乖離

▼修正主義が提起している問題は〈革命論と現実の乖離〉

◇マルクス主義の革命論とは端的には『宣言』。要約すれば次の2点

・資本主義の崩壊と階級闘争の激化は不可避

・ブルジョアジーとプロレタリアートの全面对峙と暴力的打倒で決着

◇それが、「誤り」「時代遅れ」「時代錯誤」だと。

▼革命論と現実が乖離しているとは

[A] 社会の現実が、1848年革命当時とは、大きく変化した。
 [B] 『宣言』の革命論そのものに欠陥があった。

▼では、何が変化し、何が欠陥なのか？

[A] 現実の変化 → 【Ⅲ】

[B] マルクス主義の欠陥 → 【Ⅳ】

●修正主義論争におけるそれぞれの態度

	『宣言』評価	階級観	路線的対応
ベルンシュタイン	・時代錯誤・反対	・市民化・国民化	・民主主義拡大 ・国益擁護
カウツキー	・社会革命は漸進的	・労働者から社会主義思想は生まれない	・外部から社会主義思想を持ち込む ・党勢の漸進的拡大
ルクセンブルク	・崩壊論は正しい	・労働者はベルンシュタインの見解を誤解	・改良よりも革命、改良は革命に従属
レーニン	・あざやか	・労働者は社会民主主義的意識を持っているはずがない。自然発生的にはブルジョアジーの庇護にはいる組合主義	・外部から社会民主主義意識を持ち込む ・自然発生性と闘争する。組合主義から労働運動をそらし、社会民主主義のもとに引き入れる

*レーニンは論争に直接参戦していないが、マルクス主義的潮流の分解の主要な一潮流をなす。

*外部注入という点では、カウツキーが最初提起し、レーニンはカウツキーから採用

【Ⅲ】 現実の変化・労働者の変化

●現実の変化・労働者の変化をどう見るか？

- ・労働者階級の富裕化？ 労働貴族の腐敗・墮落？ 自発的隷属？ 労働者不信？
——いずれも皮相的現象的で、問題の深層に迫っていない。

●大衆社会の出現

▼大衆社会とは

- ・19世紀末以降に、急速に進展した市民社会の変化を指す社会学的な用語
- ・密集性・同質性を特徴とするプロレタリアートにたいして、バラバラの諸個人の集合である大衆が、社会の中心になる社会
- ・19世紀末から20世紀初頭にかけて、主に社会学——ジソメル、デュルケーム、マンハイムなど——から指摘された問題、「大衆社会の出現」、「前期市民社会から後期市民社会への状況変化」、「大衆社会論」。

◇市民社会の条件の変化

- ・資本主義あるいは産業化の進展により、市民社会を構成する諸条件が変化
- ・大量の労働力の集積、大量生産・大量消費の発達、交通・通信技術の発達、都市化と人口の都市集中、権力の集中と政治の高度化、官僚制の浸透と分業の高度化、普通選挙権の獲得・拡大、マス・メディアの発達など
- ・自由放任に基づく夜警国家から、大衆民主主義に基づく福祉国家への転換

◇変化の特徴1

- ・技術の合理性、役割の専門化、人口の集中化
- ・中間団体（地域団体や自発的結社など）の無力化
- ・人間関係の非人格化、孤独、個性喪失

◇変化の特徴2

- ・ブルジョアジーとプロレタリアートの階級対立の様相の変化
- ・新しい中間層の急速で大量の台頭

◇変化の特徴3

- ・大衆とエリートという構図の出現
- ・エリート主義と反エリート主義
- ・カリスマ的指導者の待望とデマゴグの登場

・ファシズムの土壌にも

◇これらの特徴は、グローバリズムの進行する 21 世紀現在も、一層、顕著になっているともいえる。

▼これにたいしてマルクス主義の陣営は

- ・大衆社会論は大衆蔑視で反動的と批判
- ・もって変化そのものを見据えず、把握を拒否
- ・マルクス主義の欠陥

●現実の変化の根本は物象化

▼では、マルクスは——

◇物象化論

- ・マルクス主義は、大衆社会論を拒否したが、
- ・しかし、実は、マルクス『資本論』は、社会学の提起する問題・時代状況を共有していたし、もっと言えば、より根本的に把握していた。
- ・それが物象化論。マルクスは、大衆社会化の現象の諸特徴をあげるというやり方ではなく、大衆社会化を規定する根本問題が、物象化であることを解明した。

◇マルクスとマルクス主義

- ・マルクスは把握していたが、マルクス主義は把握していなかった？奇妙に聞こえるかも知れないが、これが、エンゲルス創始のマルクス主義の欠陥→【IV】

●人格的支配から非人格的支配へ

◇資本主義の経済的・政治的支配は、
・特定的人格が、他の諸個人や集団に権力を行使し支配する、という旧来のあり方からの決定的な転換である。

▼資本主義の支配のあり方の画然たる変化を下表にまとめた。

	資本主義以前の社会	資本主義の社会
経済支配	<p>・人格的な支配・隷属関係</p> <p>・奴隷保持者や封建的地主の支配関係は、奴隷や隸農にたいする人格的支配関係</p> <p>・共同体的生産関係の下で、被支配者は、支配者に人格的に隷属</p> <p>・例えば、封建領主-家臣-農民</p>	<p>・非人格的な支配・隷属関係</p> <p>・経済的支配は人格的性格を持っていない。</p> <p>・個々の賃労働者は、特定の資本家に人格的に従属していない。</p> <p>・特定の人格が支配するのではなく、物象が諸個人（賃労働者も資本家も）を支配・隷属する。</p> <p>・資本家も賃労働者も、物象のシステムの中で、物象に引きずり回され、価値増殖過程に放り込まれ、搾取し・搾取される。</p>
政治支配 国家	<p>・経済支配と政治支配は一体</p> <p>・政治的権力関係は経済的搾取関係。経済的支配者である奴隷保持者や封建的地主は、同時に、司法的・政治的・軍事的機能を持つ。</p> <p>・支配者と被支配者は、法権利的に不平等。権利・義務は、身分・社会的地位によって決定、経済的支配関係と同時に政治的支配関係は直接的に結合</p>	<p>・経済的搾取と政治支配は分離</p> <p>・経済的搾取と政治的支配は分離している。</p> <p>・土地や生産手段の所有者は、この所有に結びついた支配機能を持たない。</p> <p>・国家は、ブルジョアジーがプロレタリアートを支配・抑圧する装置ではない。</p> <p>・国家は、社会の上にそびえ立つ力として、私的所有という秩序を護持する。</p> <p>・国家は、諸個人（賃労働者も資本家も）を、自由で平等な私的所有者として取り扱い、諸個人が、私的所有者としてふるまうことを保証する。</p> <p>・ただし、それは、諸個人が、私的所有者としてふるまい、他者を私的所有者として承認する限りであり、私的所有の侵害者は暴力で排除する。そのために、自立的で独立的な力が有する。</p> <p>◇総じて、資本主義の経済的・政治的支配は、特定の人格が、他の諸個人や集団</p>

		に権力を行使し支配する、という旧来のあり方からの決定的な転換である
--	--	-----------------------------------

●ベルンシュタイン「プロレタリアの市民化・国民化」

◇ベルンシュタインの「プロレタリアの市民化・国民化」という指摘は、上述の——

- ・大衆社会の出現
- ・支配のあり方の変化

——ということを、ベルンシュタイン流に——現状追認的に——問題提起していた。

◇では、「プロレタリアの市民化・国民化」とは、マルクス『資本論』の把握によれば、どうということになるか？

- ・「プロレタリアの市民化」 → 物象への隷属
- ・「プロレタリアの国民化」 → 近代国家による国民統合

●プロレタリアの市民化 = 物象への隷属

▼物象化・物象への隷属とは

◇物象とは、商品・貨幣・資本など。

◇生産は、本来的に、人間と自然の関係、および人間と人間の関係。ところが、資本主義では

- ・人間の能力・関係などが、物象に移ってしまって、
- ・物象が、生産の主人公になってしまい、
- ・物象が、勝手に生産関係を動かしている。

◇主体であるはずの人間は、物象に引きずりまわされる、みすぼらしい存在に落とされている。

——これが物象化・物象への隷属

◇賃労働者も資本家も市民として自由・平等だが、しかし同時に、賃労働者も資本家も、商品・貨幣・資本の物象的な力に隷属する。そして、賃労働が資本に搾取される。

◇物象化によって、さらに、

- ・人間が、自然・大地への本源的な関りも断ち切られる。
 - ・さらに、人間の内部においても、理性的なものと、自然的なものとは分離され、一方で、理性的なものは物象の理性として自立化し、他方で、自然的な感情・欲求は非理性的なものとして抑圧される。
 - ・人間の生産・再生産の主要に担っている女性の身体・労働・能力・欲求は、非理性的なものとして徹底的な破壊・抑圧にさらされる³。
- 物象化は、環境にたいする人間の破壊、および女性の身体・労働・能力・欲求への破壊・抑圧の原因である。

▼市民社会とは？市民とは？

・資本主義社会では、公的な側面が国家として、私的な側面が市民社会として分離する。・市民社会とは、労働における人間と人間との社会的関係が、物象と物象との社会的関係（物象的連関）として現われ・展開される社会。

・市民社会では、労働者も資本家も私的な諸個人として、物象（＝商品・貨幣・資本など）を通して社会関係に入る。そして、諸個人は、互いに、商品・貨幣・資本という物象の人格的代表者・物象の私的所有者としてかかわりあう。労働者も、労働力という物象の人格的代表者・物象の私的所有者として、資本家などと自由・平等な関係にある。

・市民とは、私的諸個人であり、物象の人格的代表者・私的所有者であり、自由・平等だが、商品・貨幣・資本の物象的な力に隷属する存在を言う。

・特徴は、経済的支配が人格的性格を持っていないことだ。個々の賃労働者は、特定の資本家に人格的に従属していない。

◇搾取は？

・とすると搾取関係はどうなるのか？

・資本・賃労働の搾取関係が、資本主義における基本的な生産関係である。

・ところが、搾取関係は、物象と物象の関係という市民社会の社会関係によって覆われて展開している（生産関係の物象化）。つまり、物象が主体化している。

・しかも、諸個人は、物象を体現する人格として社会関係を形成する（物象の人格化）。つまり、資本家は、資本という物象の人格であり、資本に意志を支配されているが、同じように、労働者も、労働力という物象の人格であり、労働力という物象に意志を支配されている。ここが重要！

³ S.フェデリーチ「キャリバンと魔女」参照

・さらに、次で述べるように、経済的支配から政治が分離し、政治的支配が、諸個人を物象の人格として自由・平等に扱い、あらゆる諸個人の私的所有を保護するという形で行われている。

◇資本・賃労働の搾取関係は、

i. 生産関係の物象化＝物象が主人公となってしまう仕組み

ii. 物象の人格化＝諸個人の意志が物象に支配される仕組み

さらに、iii. 諸個人を、物象の人格として自由・平等に扱う政治支配の仕組みによって、

・諸個人の日常意識には認識できない構造になっている。

▼だけどなぜ物象に依存することに？

・資本主義以前の社会では、労働における人間と人間との社会的関係は、共同体を通して展開され、諸個人は共同体を通して社会的にかかわった。

・ところが、資本主義の勃興は、その共同体を破壊していった。諸個人は、バラバラの私的諸個人として放り出された。そこで、私的諸個人の私的諸労働は、互いの生産物を商品として交換し合うことをとおして、社会的な性格をもつようになる。その交換＝商品関係＝物象的連関が、私的諸労働を社会的な政策に転換するシステムと成立する。

●国民国家による統合

◇ベルンシュタインの「プロレタリアの国民化」とは？

・資本家も、労働者も、物象の私的所有者＝物象の人格として、自由・平等に扱われる。そして、あらゆる市民の私的所有を保護するという形で政治的支配が行われる。

・つまり、労働者だからといって、法権利的に不平等に扱わない。

・このように、労働者が、市民＝公民・国民として扱われ、労働者自身もまた、市民＝公民・国民としてふるまう様、つまり国民国家への統合を、ベルンシュタインは「プロレタリアの国民化」とした。

◇資本主義以前の社会

・資本主義成立以前では、経済的支配と政治的支配は分離していない。政治的権力関係は同時に経済的搾取関係であった。

・資本主義成立以前の社会においては、人びとは初めから法権利的に不平等なものとして相対した。権利と義務は、それぞれの身分あるいは社会的地位によって決定され、経済的支配関係と政治的支配関係は直接的にむすびついていた。

◇資本主義社会

・資本主義において、市民社会から近代国家が分離される。つまり、経済的支配から政治的支配が分離される。

・資本主義のもとでは、政治的力は、経済的搾取の維持のためには直接的には必要とされない。国家が社会の上にそびえ立つ力として、社会の成員が私的所有者としてふるまうということを保証すれば、それで十分である。

・ただし、すべての人びとが、他者を私的所有者として承認することを強制する。そのために、自立的で独立的な力を必要とする。

したがって、経済的支配は、もはや人格的性格を持っておらず、個々の賃労働者は特定の資本家に人格的に従属していない。労働力しか持たない賃労働者も、生産手段を所持する資本家も、法権利的に平等で自由な私的所有者として相対する。

◇国民国家

・まず、一つの上の項「プロレタリアの市民化＝物象への隷属」で見たように、資本主義社会における経済的支配は、資本主義以前の社会の経済的支配とはまったく異なっている。

・さらに、上で見たように、市民社会を政治的に総括する国民国家もまた、近代以前の国家とは、まったく性格を示している。

・繰り返せば、国民国家は、社会の成員が、私的所有者としてふるまうことを保証するのであって、ブルジョアジーがプロレタリアートを支配・抑圧する装置という単純な構造ではないのである。そして、その私的所有を護持するために暴力を有し、私的所有を侵害する者は、社会の敵として暴力でもって排除する。

・ただし、すべての人びとが、他者を私的所有者として承認することを強制する。そのために、自立的で独立的な力が有する。私的所有を侵害する者を、社会の敵として暴力でもって排除する。

◇もちろん権威主義国家も

・マルクスの時代のボナパルトや現代のトランプという形もある。

・しかし、これも、以上の国民国家論を土台にして把握する必要がある。

・ボナパルトにしても、トランプにして、特定のブルジョアジーや特定の階級の利害を体現した支配では単純にはない、と把握するところが重要である。

●ところが、マルクス主義は――

【Ⅳ】 マルクス主義の欠陥

● マルクス『資本論』とマルクス主義は違う

▼ 資本主義の矛盾・支配のあり方を隠蔽

革命論において、マルクス主義の一番の問題点は、『宣言』の「これまでの社会のすべての歴史は階級闘争の歴史」という素朴な理解で、資本主義における支配をも割り切ろうとすることによって、資本主義以前の社会から資本主義社会への支配のあり方の決定的変化を把握できない・しない点、もっといえば、資本主義以前の社会から資本主義社会への決定的変化を隠蔽し、資本主義の物象のシステムの本質とその矛盾の把握を阻害する役割を果たしてきた点である。

この点について【Ⅲ】でも述べたが、ここでは、まず、「階級とは・階級対立とは」という切り口で展開したい。

● 階級とは・階級対立とは

▼ 階級対立一辺倒の見方

◇マルクス主義は、搾取論に基づき、階級対立を、資本主義社会の主要な矛盾と理解し、階級対立一辺倒を主張してきた。

◇また、マルクス主義は、プロレタリアートの階級位置からして、必然的に階級意識が発展するだろうと考えた。あるいは、この階級意識が多かれ少なかれ革命的な内容を持つはずだとした。そして、プロレタリアートが、資本主義発展の過程をつうじて、必然的に、階級的に自覚した革命的階級に成長するであろうと想定された。

▼ 物象と物象の対立

◇しかし、階級対立とは、マルクスの『資本論』・物象化論に踏まえるならば、

・資本という物象と、労働力という物象との対立。さらにいえば、それが、資本家という人格と賃労働者という人格の対立として現象したもの。

・そして、資本家も賃労働者も、物象のシステム(生産関係の物象化と物象による支配)の中で、物象の力に規定されている。諸個人は、物象に引きずり回され、価値増殖過程に放り込まれ、搾取し・搾取される。

・物象のシステムという土台・枠組みの中で、搾取が展開される。

◇したがって、重要なことは、階級対立がどこまで激化しても、それ自体は、物象のシ

システムの枠内を超えることはない。

・また、階級意識が、資本関係から解放の自覚に自動的に発展するわけではない。

◇階級対立、資本・賃労働関係、物象と物象との対立は、資本主義＝物象のシステムの矛盾が表面的に現われたものである。そして、資本主義＝物象のシステム（生産関係の物象化と物象による支配）の深層には、「バラバラの私的諸労働が、物象的連関に媒介されることによってはじめて、社会的力・社会的連関に転化される」という矛盾、「物象という私的なものによって社会的なものが担われる」「私的でかつ社会的な」という矛盾が盤踞している。

●マルクス主義：「生産手段の所有・非所有」

◇マルクス主義では、階級とは、階級対立とは、次のように説明する。

「階級とは、生産手段の所有・非所有、並びに生産関係上の地位」

「階級対立は、生産手段の所有・非所有、並びに生産関係上の地位をめぐる対立」

・つまり、マルクス主義では、「生産手段の所有・非所有」を指標として区別されている。これが「常識」「定説」とされてきた。

▼所有論という躓きの石

・しかし、ここに大きな問題がある。階級論の問題を考える上で、所有という概念が、マルクス主義にとって大きな躓きの石となってきた。

◇まず、「生産手段の所有・非所有」を指標とする所有論・階級論は、「これまでの社会のすべての歴史は階級闘争の歴史」（『宣言』）という歴史観を正当化するために土台をなしてきた。「生産手段の所有・非所有」という問題をもって、古代から現代までを歴史貫通的に割り切ることで、階級闘争の歴史を大きく見通せるはずだという考えである。

◇しかし、まず、「生産手段の所有・非所有」で階級を区別するという理解は、マルクス主義のオリジナルではない。スミスなどの理解——「階級の区別は財産関係の種類や量の違いにある」という規定の延長に過ぎず、とくに革命的な見方ではない。

・しかも、マルクス『資本論』・物象化論にもとづけば、「生産手段の所有・非所有」で階級を区別するという理解は大きな誤認である。

▼自然的諸条件と社会的承認

◇所有とは、一般には——ブルジョア法的には、〈ある者が、事物を自分のものとして持っていること、事物を自由勝手に処理する権利、対象への意志的支配の権能〉、などと解される。

・しかし、マルクスは、このような説明は、ブルジョア法の世界の「法律学的幻想」であると批判した。それは、次の2点のような本源的な（近代以前に買かれ、そして本来的な）意味が欠落している、という批判である。

(1)自然的諸条件の関り：一つは、所有とは、本源的には、生産者＝労働する諸個人の（土地・生産手段などの）自然的な生産諸条件にたいする関りの問題である。生産者諸個人は、本源的には、自然的な生産諸条件にたいして自らの諸条件とするようにして関わる。この「自らの諸条件とするように」とは、つまり、生産者諸個人が、自然的生産諸条件にたいして、いわば延長された自分の身体として関係するということである。自然は人間の非有機的的身体であり、自然と人間とが本源的には統一しているということである。これが所有の本源的な内容である。

(2)社会的承認：今一つは、所有は、その前提として、共同意志によって社会的に承認されている、ということによって成立している。生産者諸個人が、共同体・共同社会の成員であることを前提とする。生産者諸個人は、共同体・共同社会の一員であるということを経験してはじめて、生産諸条件を本源的に所有することができる。これが所有の本源的な前提である。

◇そして、マルクスは、こうした所有の本源的な意味および前提を踏まえて、前近代的な所有と、近代的な所有＝私的所有とが、概念として決定的に違うということを明らかにした。

▼前近代的な所有

◇前近代的な所有では、奴隷制や農奴制のようにその形態（外形）において変化はあるが、所有の本源的な意味と前提は維持されている。すなわち、

・生産者諸個人は、共同体・共同社会において、生まれながらにして共同体・共同社会の成員として承認されており、かつ、自然的生産諸条件にたいして、自分の所有物のようにして関わる。

◇したがって、前近代的な所有においては、生産者諸個人の所有関係は、労働の結果ではなく、労働の前提をなしている。つまり、生産者諸個人はあらかじめ、自然発生的に、自然的な生産諸条件にたいして自分の所有物として関わるのである。

▼近代的な所有＝私的所有

◇ところが、資本主義への突入とともに、(2)共同体・共同社会が破壊・解体され、生産者諸個人は、バラバラの私的諸個人として放り出される。同時に、(1)自然を自分の非有機的的身体とするような、自然と人間との本源的な関係も破壊される。

・つまり、資本主義においては、所有の本源的な前提も内容も破壊されている。

◇そこから、バラバラの私的生産者である諸個人は、自らの私的諸労働が直接的には社会性をもたないが故に、自らの労働生産物どうしを関係させることを通して、その労働生産物の方に社会的な力を持たせる（物象化する）ことで、社会的な連関を成立させる。私的なものでしかない商品や貨幣が、擬制の共同体のように社会的連関を成立させているのである。もちろん、諸個人はそれを無自覚のうちに遂行している。

◇つまり、所有の本源的な前提も内容も破壊されている中で、諸個人は、物象の私的所有者として登場し、互いを人格化された物象として承認し合う。

近代的所有は、もはや、所有の本源的な前提も内容も喪失しており、ただ物象の私的
所有として、物象に媒介されてのみ現象する。私的所有とは、物象を媒介に現象する承認関係の法的な表現である。

・近代においては、諸個人は、本源的な意味での所有者であることはできない。物象を媒介として契約を結ぶことによってしか、所有者たることはできないのである。

◇さて、以上から、「生産手段の所有・非所有」をもって階級を区別する議論は成立しようもない。

・「資本家は生産手段を所有、賃労働者は非所有」という構図ではない。

・資本主義社会においては、資本家も資本という物象の私的所有者、賃労働者も労働力という物象の私的所有者。そして、物象を媒介として、私的所有者として、承認し合う関係でしかない。

・「生産手段の所有・非所有」という議論は、根本的に所有概念が混乱しており、しかも、近代的な所有の特異性をまったくとらえていない。そして、資本主義の物象のシステムの本質とその矛盾の把握を阻害する役割を果たすものである。

▼「所有、自由、平等」

◇しかも、私的所有者、あるいは物象の人格的担い手として、互いに自由・平等。

・この自由・平等は建前・形式ではない。ポイントは、所有・自由・平等の主体が、私的所有者であり、物象の人格的担い手である点である。私的所有者・物象の人格的担い手が互い平等に承認し合うこと、そして、物象が価値通りに評価され自由に交換されること——これが物象のシステムにおける自由・平等である。その限りでウソもゴマカシもない。

・しかし、物象と物象の交換後の結果については預かり知らない。だから、搾取関係がすさまじい格差・不平等を生みだし続ける。

・こうして搾取関係は不断に露見するが、しかし同時に不断に商品関係に転回する。なぜなら、商品関係をわれわれ自身が不断に無意識に発生させているから。

・搾取関係と商品関係とを不断に転回する構造——これによって、われわれの日常意識においては、搾取関係のみを取り出して把握することを困難にしている。

・だからまた、階級対立がどこまで激化しても、それ自体は、物象のシステムの枠内を超えることはないのである。

◇だから、「バラバラの私的諸労働が、物象的連関に媒介されることによって、社会的力・社会的連関に転化される」という物象のシステムそのものの理論的に把握することが必要である。同時に、「私的かつ社会的」という矛盾=存立する矛盾（後述）が、コモン=「社会的なもの」を析出するのをとらえてそれを拡大していくということが社会運動の要諦である。

●存立する矛盾とは

◇マルクスの矛盾論をとらえることが、マルクス主義を根本的に乗り越える上で、またアソシエーション論をつかむ上でカギをなす。

・物象のシステム＝「バラバラの私的諸労働が、物象的連関に媒介されることによって、社会的力・社会的連関に転化される」という矛盾

・「私的かつ社会的」という矛盾

◇〔対立と統一との矛盾的統一〕

・資本主義社会では、物象化によって、真の主体でありながら個別化・客体化された人間と、自立化・主体化した物象とが対立。同時に、賃労働と資本とが、対立しつつ互いに相手の存在なしには存立できないものとして、現実的な統一が不断に形成されている。

◇存立する矛盾とは、

・〔対立と統一との矛盾的統一〕という矛盾故に、資本主義社会が存立しているという把握であり、それ故に、資本主義社会は、その深層において、人間(労働する諸個人)こそを主体としたソシエーション(人間を主体とした連関)が対立的形態で潜在している。同時にそれ故にその矛盾を不断に顕在化させ、新しい社会への転化を要請している、という把握である。

◇新しい社会の現実的な形態が、コモンを析出・顕在化させている。これを意識的積極的に顕在化させていくことが、21世紀の社会運動の役割である。

▼マルクスの資本主義＝物象のシステムにおける矛盾のとらえ方

① 資本主義社会は、根源的には、人間(労働する諸個人)が、社会を不断に・絶えず産出・生成している。人間(労働する諸個人)こそ、この社会を形成する真の主体である。

② しかし、資本主義社会の眼前の現実には、①人間(労働する諸個人)の能力性・関係性・社会性・普遍性といったものが、物象(＝商品・貨幣・資本)という形で自立化し・主体化(＝物象化)し、逆に、④人間は個別化・客体化され、物象に従属させられている(＝疎外)。

③ そして、真の主体でありながら個別化・客体化された人間(④)と、自立化・主体化した物象(②)とが対立している。それが、階級対立として現象している。〔対立〕

しかし、また他方で、賃労働と資本とが、対立しつつ互いに相手の存在なしには存立できないものとして、現実的な統一が不断に形成されている。(=物象的連関)〔統一〕

① 資本主義社会は、この対立と統一とを矛盾的に統一することによって、存立が可能になっている。矛盾故に存立しているという把握が重要である。(対立と統一との矛盾的統一)

② しかしまた、その〔対立と統一との矛盾的統一〕の故に、資本主義社会は、その深層において、やはり、人間(労働する諸個人)こそが主体として、社会を産出しているという根源的なあり方によって規定されており、故に、対立的な形態であるが、アソシエーション(人間を主体とした連関)が資本主義の中に存在している。そして、矛盾の解決に向かって不断に運動し、新しい社会への転化を要請し、その現実的な形態としてのコモンを析出・顕在化させている。

これを意識的積極的に顕在化させていくことが、21世紀の社会運動の役割である。

・マルクスは、この矛盾論を、最初期の『ヘーゲル国法論批判』で確立し、曲折を経て、『資本論』において、全面的に展開した。

●理想としての共産主義か

——対立的に形成されている共産主義か

◇存立する矛盾で述べたのが、「対立的に形成されている共産主義」

◇ところが、マルクス主義は、「存立する矛盾」をまったく把握できないために、どうやって共産主義に向かうのかを理論的に明らかにできない。

・理想として、倫理として、目的として、共産主義を掲げる以上にならない。

・それと無媒介に、資本主義の崩壊と階級闘争の激化は不可避、ブルジョアジーとプロレタリアートの全面对峙と暴力的打倒で決着という単線的で平板な革命論に固執した。

●素朴な実証主義+弁証法

▼なぜマルクス主義はそうなってしまったのか?

▼エンゲルスの「科学」の強調がポイント

・『空想から科学へ』、「科学的社会主義」

・「自然科学のように」

▼実証主義とは

・認識の対象を経験的事実に限り、その背後に超経験的実在を認めない立場。

- ・近代自然科学の方法を範としている。
- ・客観的世界は因果的連関としてのみある。
- ・〈事実→実験観察→仮説→検証〉という認識手続きによって事実をつかむという方法

◇+弁証法

- ・ただし、エンゲルスの場合、既存の科学は「静学にとどまっている」として、実証主義に補足して「弁証法」を導入。
- ・静学にたいする動学を強調、階級対立の把握における優位性を主張。
(しかし、エンゲルスの「弁証法」は、運動の態様の分類学。ヘーゲル＝マルクスの「存立する矛盾」とはまったく似て非)

▼では実証主義の何が問題なのか？

●実証主義＝近代の方法＝物象の精神

▼実証主義では物象のシステムを把握できないから

- ・店頭に並ぶ野菜、家電、衣類など。あるいは工場設備、燃料や材料。あるいは千円札、1万円札。
- ・一方では、いずれもただのモノ。千円札もただの紙。
- ・しかし同時に商品、資本、あるいは貨幣。

◇ただのモノが、どうして、商品・貨幣・資本なのか？

- ・それは、人間の能力・関係などが、物象に移ってしまって、物象が、生産の主人公になってしまい、物象が、勝手に生産関係を動かしている。
- ・主体であるはずの人間は、物象に引きずりまわされる、みすぼらしい存在に落とされている。
- ・つまり、一言でいえば、生産関係が物象化されているから。
- ・しかも、i.生産関係の物象化＝物象が主人公となってしまう仕組み、およびii.物象の人格化＝諸個人の意志が物象に支配される仕組み、さらにiii.諸個人を、物象の人格として自由・平等に扱う政治支配の仕組みによって、諸個人の日常意識には認識できない構造になっている。

▼経験的事実の背後に物象的連関

- ・実証主義＝近代方法は、認識の対象を、経験的事実に限り、その背後に超経験的実在を認めないという方法だが、上で見たように、生産関係が物象化した物象のシステムとは、まさに〈経験的事実の背後に、物象的連関が存在する〉というシステム。
- ・だから、実証主義では、資本主義＝物象のシステムを批判・解明・止揚できない。

▼実証主義＝物象の精神

- ◇近代科学・啓蒙思想・批判哲学を貫くものは—

- ・人間・社会・自然に関して、
- ・合理的な観点からはみ出すものはすべて抑圧・解体し、
- ・合理的に計算可能なものに整理・変換し、
- ・合理的な機能的連関が支配する世界として把握する。

◇近代科学=物象化した意識

・近代とは、物象の支配する世界、物象を介してしか人間と人間の間と自然の関係が成立しない社会

- ・近代科学・啓蒙思想・批判哲学は、物象化した意識構造から成立したもの。

ex.デカルト的自我

- ・実証主義は、近代の固有の世界観、自らを近代に閉じ込める方法
- ・マルクス主義は、観的には、近代の乗り越えを追求したが、しかし、実証主義を自らの方法としたがゆえに、近代の乗り越えにおいて崩壊した。

●19世紀末・20世紀初頭の知の状況

- ・一方で、近代科学の劇的發展と共に実証主義が席卷
- ・他方で、それにたいする反発として現象学。マッハ、フッサール、ボグダーノフ
- ・その二潮流の対立と補完の関係によって、知的混迷が現代まで続いている。

▼実証主義の限界を喝破したマルクス

- ・マルクス主義は、実証主義にとらわれてしまった。
- ・しかしまた、実証主義の限界を喝破したのはマルクスだった。
- ・マルクス『資本論』の論理の中心は、史的唯物論などではなく、物象化論
- ・ところは、エンゲルスによって、『宣言』と「唯物史観の公式」をもって変革を論じたが、
- ・そうではなく、マルクス『資本論』の物象化論にそくしてこそはじめて変革を論じることができる。 (※こういう主張をしたのがルカーチ、しかし……⁴)

⁴ ルカーチは、『資本論』を物象化論として読む方向を切り開きつつも、結局、物象化を虚偽認識というレベルでしか把握できず、一方で、実存主義的な投企による主体形成、他方で、組織している意識=党、という論理の間を揺れながら、スターリン主義に回帰した。

【V】レーニンからスターリンへ

(1) レーニンの修正＝外部注入論

●レーニン「なにをなすべきか？」

- ・語弊を恐れず言えば、レーニンは、ベルンシュタインと「同じ」現実を見ていた。
- ・ただ、ベルンシュタインが、マルクス主義の基本的確認を破棄する方向で対応したのにたいして、
- ・レーニンも「なにをなす」は、ひとつの修正を加えた。

▼「修正」点：「社会民主主義的意識は外部からしかもたらしえない」

■「なにをなすべきか？」1902年

- ・労働者は、社会民主主義 [=共産主義] 的意識をもてるはずがない。
- ・社会民主主義的意識は外部からしかもたらしえない。
- ・自然発生的な運動とは組合主義。組合主義とは、ブルジョアジーによる労働者の思想的奴隷化。
- ・社会民主主義者の任務は、自然発生性と闘争すること、ブルジョアジーの庇護のもとにはいろうとする組合主義の自然発生的な志向から労働運動をそらし、革命的社會民主主義の庇護のもとに引き入れることである。

◇いわゆる「外部注入論」。

- ・実は、カウツキーの主張をレーニンが引き継いだものだった。
- ・〈資本主義の崩壊と階級闘争の激化は不可避、ブルジョアジーとプロレタリアートの全面对峙と暴力的決着〉というマルクス主義の革命論を、原理論として確認しつつ、現実論としては――

- ・社会民主主義的意識の外部注入
- ・自然発生性にたいする目的意志的な闘争

という内容が強力に確認された。

◇「労働者は、社会民主主義 [= 共産主義] 的意識をもてるはずがない」というのは、ロシアの労働者階級・労働運動が特殊な条件にあるから、ではもちろんない。

・レーニンは、この時期、ウェブ夫妻のイギリス労働運動を研究しており、ロシアの現実とともに、イギリスという当時の最先端の労働運動を視野に入れた問題意識。

◇これは、ベルンシュタイン的な修正とは真逆だが、小さくない「修正」だ。

・というのも、「存在が意識を規定する」、つまり、「客観的過程が、意識を革命に押しやる」という経済決定論がマルクス主義の基本的確認であったが、レーニンの主張は、「革命党による主意主義的な働きかけが、労働者の意識を変革する」、つまり、「存在と意識の関係は逆転する」ということだからだ。

◇しかし、レーニンの提起は――

〔A〕労働者の支配の現実の変化。物象への従属と国民国家への統合

――という問題を理論的につかみとるものではない。

〔B〕マルクス主義自体の欠陥。物象の支配する世界を把握できない。単線的な革命論。

――しかも、マルクス主義の欠陥を抜本的に克服するものでもない。

◇そして、この外部注入論は、革命後のプロ独権力、レーニンースターリンの下での、商品関係＝物象関係にたいする暴力的粉砕闘争に血道をあげる路線の組織論的な原点であったといえる。

(2) レーニン いまひとつの修正

▼帝国主義論——労働貴族論と民族・植民問題

■『資本主義の最高の段階としての帝国主義』1916年

【超過利潤による労働貴族の育成・労働運動の分裂】

・このように巨額の超過利潤を利用すれば、指導的労働者や上流労働貴族を買収することが可能になる（ちなみに、なぜ「超過利潤」という言い方をするかといえば、資本家が、自分の国の労働者から搾り取る利潤以上を得ているからである）。……

・ブルジョア化した労働者ないし「労働貴族」は、その生活様式や賃金水準、世界観全体に照らすなら、完全に小市民的である。……労働貴族層は、労働運動において文字通りブルジョアジーの手先となり、労働者を監督する資本家階級の代理人を務め、また改良主義と排外愛国主義を伝導する正真正銘の宣伝家となっている……。

・帝国主義は、労働者をも区分し、そのうちの一部を特権化させる傾向がある。そしてその特権的労働者を、残りのプロレタリアート大衆から切り離そうとする。

イギリスでは、帝国主義がともすれば労働者を分裂させ、その内部の日和見主義を強め、労働運動を一時的に腐敗させる傾向がある。

・[労働者の特権化の]原因は、この国が(1)全世界を搾取し、(2)世界市場を独占し、(3)植民地を独占していること。結果は、イギリスのプロレタリアートの一部が(1)ブルジョア化し、(2)おのれの指導者として、ブルジョアジーに買収された人々か、あるいは少なくとも報酬を受け取っている人々を迎えていること、である。

■ 『民族・植民問題にかんする指針および補足テーゼ』1920年

【帝国主義の植民地からの利潤とプロレタリア革命】

・ヨーロッパ大戦とその結果は、ヨーロッパ以外の被抑圧諸国の人民大衆が世界資本主義の集中によつて、ヨーロッパでのプロレタリア運動と不可分に結びついていることを、まざまざとせしめている。

・植民地で獲得される純利得は、現代資本主義の資力の主要な源泉のひとつである。ヨーロッパの労働者階級は、この源泉が最終的に閉鎖されるときにはじめて、資本主義制度の打倒に成功するであろう。

・世界革命の完全な成功のためには、これら両勢力 [植民地諸国の解放闘争と帝国主義国のプロレタリア革命闘争] の協同が必要である。

● 帝国主義論という論点ズラシ

◇労働者階級の現実の状態をめぐって、上で外部注入論を見たが、いまひとつの論点が出されている。帝国主義論である。

◇帝国主義論では、

・一方で、植民地から獲得した超過利潤による、労働者階級の上層の「買収」「裏切り」というロジックが提起され、

・他方で、帝国主義国と植民地諸国の両人民の連帯ということが革命戦略の環として提起されている。

——とくに連帯論を革命戦略にすえたことは優れて実践的な提起である。

◇しかし、もう少し見ると、帝国主義論は、

・ベルンシュタインの修正主義 = 〈崩壊・革命論の否定〉にたいして、

i. 先進資本主義国内はともかく、帝国主義的世界システムとしては危機と破局ではない。

ii. 先進資本主義国の労働運動の相対的安定状況は、植民地からの超過利潤によるもの。

iii. i. ii. より、むしろ民族問題の激化と世界戦争という新しい危機をつくりだした。

——という新たな論理を提出している。

◇これは、〈崩壊・革命論〉という単線的な革命論にたいして、原理論と段階論という二段構えの革命論へと革命論を修正するものである。二段構えの革命論とは、すなわち——

- i. 本質形態・原理論としての階級闘争論
- ii. 現実形態・段階論としての民族解放闘争論

——つまり、マルクス主義の伝統的な主張である階級闘争激化論は、本質形態・原理論としては踏まえるが、現実形態・段階論としての民族解放闘争論に革命論の重心を移動させるということである。

◇論点ズラシ

・しかしこの二段構えの革命論は、資本主義＝物象のシステムにたいして正面から挑み、そこにおける変革主体の問題に解を与えるのではなく、そこからの論点ズラシでしかない。

・そして、先進資本主義国における革命を理論的に相対化しており、実際にも中心ではなく周辺でしか革命は進行しなかった。

● 「買収」「裏切り」論の欠陥

・超過利潤による「買収」「裏切り」が、先進資本主義国の労働運動の相対的安定の原因とする見方は、重大な問題を隠してしまう。

◇そもそも、「買収」「裏切り」という用語の背景には、「労働者階級の階級的利害は同一」「労働者階級は資本家階級とは対立する意識をもつ」という抽象的観念的なあるべき論・規範論が存在している。

・そして、この規範にそぐわない現実は、「買収」ないしブルジョアイデオロギーによる汚染とみなされる。

・そして、対策としては、(1)社会民主主義的意識の外部注入と、(2)「労働貴族」にたいする仮借なき闘争、ということになる。

▼物象化と国民統合

・しかし、すでに見てきたように、問題は「買収」「イデオロギー汚染」ではなく、物象化と国民統合という資本主義の社会の支配のあり方ということである。

・物象化と国民統合という問題を正面に据えて革命論を立て直すことが唯一の回答であった。

・しかし、「買収」「裏切り」論は、ある種のわかりやすさゆえに、物象化と国民統合という問題を隠蔽してしまったのである。

⁵ レーニンの方法を、積極的に明示したのが、宇野弘蔵の原理論・段階論・現状分析という方法論

(3) プロレタリア独裁の実行

▼レーニン「独裁を実現するのは革命的人民だけ」

■「カデットの勝利と労働者党の任務」1906年

【独裁とは暴力による無制限の権力】

・独裁とは、なにものにも制限されない、どんな法律によっても、どんな規則によっても束縛されない、直接暴力に依拠する権力

【独裁を実現するのは革命的人民だけ】

・なぜ、ただ革命的人民の独裁であって、全人民の独裁ではないのか？……肉体的にうちひしがれた人々、おどおどした人々、道徳的にうちひしがれた人々……（などは独裁にふさわしくない）。……独裁を実現するのは全人民ではなくて、革命的人民だけ

◇1905年革命の総括として、独裁概念を明示に提起。

◇「独裁とは暴力による無制限の権力」とは古典的な規定ともいえるが、

・間違いは、資本主義社会も、ブルジョアジーの独裁と理解している点。既にみたように、ブルジョア国家は、市民社会との分離において、私的所有者を公民として自由・平等に扱うことが、建前ではなく、実質としている。

◇しかも、「独裁を実現するのは革命的人民だけ」として、「革命的人民」という基準を示している。そしてその基準にそぐわない人びとを、例示・列挙しているが、結局、もっとも「革命的」な党中央を頂点とした、革命的な序列の下で、「革命的」でない人びとにたいする支配という構造がすでに構想されている。

・それは、「左翼空論主義」でさらに実践的な提起される。

▼レーニン「ブルジョアジーを絶滅する暴力」

■「プロレタリア革命の背教者カウツキー」1918年

【暴力に立脚し法律に拘束されない】

・独裁は、直接に暴力に立脚し、どんな法律にも拘束されない権力である。

・プロレタリアートの革命的独裁は、ブルジョアジーにたいするプロレタリアートの暴力によってたたかいとられ維持される権力であり、どんな法律にも拘束されない権力である。

【ブルジョアジーを絶滅する暴力】

- ・独裁が、他の階級にたいする一階級の革命的暴力。
- ・プロレタリアートの革命的独裁は、ブルジョアジーにたいする暴力である。
- ・ブルジョアジーを絶滅するためにブルジョアジーにむけられるプロレタリアートの革命的暴力。

【平等と自由を破壊する独裁】

独裁の欠くことのできない標識、独裁の必須の条件は、階級としての搾取者を暴力的に抑圧することであり、したがって、この階級にたいして「純粋民主主義」を、すなわち平等と自由を破壊することである。

◇ブルジョアジーを国家暴力で絶滅するのが独裁の任務であるとし、そのために自由と平等を破壊することが必須の条件であるとしている。

・1918年、諸列強の下渉戦争と反革命との厳しい内戦という革命ロシアを取りまく状況は踏まえて理解する必要はある。

・しかし、実際には、次の「空論主義」でも公言されているように、実際に問題になっているのは、商品関係・物象関係を、国家暴力で粉碎しようとして、小商品生産者たちにたいする、破壊と略奪、絶滅戦争であった。

・資本主義社会の支配のあり方を、原理的にはき違えているために生じている深刻な所業である。

▼レーニン「習慣の力と小規模生産の絶滅のための厳格な規律とプロ独」

■ 「共産主義内の左翼空論主義」1920年

【習慣の力と小規模生産を絶滅するための独裁】

・「打倒されたブルジョアジーの反抗」力は、国際資本の力、ブルジョアジーの国際的な連繫の力と強固さにあるばかりでなく、習慣の力、小規模生産の力にもある。なぜなら、小規模生産は、残念ながら、まだこの世におびただしくのこっていて、この小規模生産が、資本主義とブルジョアジーを、たえず、毎日、毎時間、自然発生的に、大規模に生み出しているからである。すべてこういう理由からして、プロレタリアートの独裁は必要である。

【習慣の力と小規模生産の絶滅戦争で確立された無条件の中央集権と厳格な規律】

・プロレタリアートの無条件の中央集権と最も厳格な規律がブルジョアジーに勝利する一基本的条件である。

・ポリシェヴィズムは、かつてなかったほど困難な条件のもとで、1917-1920年に、もっとも厳格な中央集権と鉄の規律をつくりあげ、それを首尾よく実行することができた。

【階級の廃絶は小商品生産者の廃絶】

・階級を廃絶することは、地主と資本家を追い出すこと——われわれは、これを比較的なたやすくやりとげた——だけを意味するのではなく、小商品生産者を廃絶する [強調はレーニン] ことをも意味

しているが、彼らを追いだすことはできるものでなく〔強調はレーニン〕、押しつぶすこともできるものでなく、彼らとは仲良く暮らしていかなければならない。非常に長期にわたる、漸進的な、慎重な組織的活動によって始めて、彼らをつくりかえ、再教育することができる(またそうすべきである)。彼ら〔小商品生産者〕は、小ブルジョア的な雰囲気、四方八方からプロレタリアートを取りまき、それをプロレタリアートにしみこませ、それによってプロレタリアートを墮落させ、たえずプロレタリアートの内部に小ブルジョア的な無定見、細分状態、また個人主義を、また熱狂から意気消沈への変転のぶりかえしを引きおこしている。

【教育と流血で】

これに對抗し、プロレタリアートのもっている組織者としての役割(これが、プロレタリアートの主要な役割である)ただしく、首尾よく果たして勝利するためには、プロレタリアートの政党の内部に、もっとも厳格な中央集権と規律が必要である。プロレタリアートの独裁は、旧社会の諸勢力と伝統にたいする頑強な闘争であり、流血のものもそうでないものも、暴力的なものも平和的なものも、軍事的なものも経済的なものも、教育的なものも行政的なものもである。幾百万人、幾千万人の習慣の力は、もっともおそろべき力である。闘争のなかできたえられた鉄のような党がなく、その階級のすべての誠実な人から信頼されている党がなく、大衆の気分を注視し、大衆に影響をおよぼすことのできる党がなければ、このような闘争〔習慣の力、小規模生産の力を絶滅する闘争〕をして成功することはできない。集中化された大ブルジョアジーに打ち勝つことは、何百万もの小経営主に「打ち勝つ」ことよりも、千分の一も容易である。小経営主は、日常的に、日ごとに、気づかない、とらえどころのない腐敗作用をおよぼす活動によって、ブルジョアジーに必要な結果、ブルジョアジーを復活させる結果そのものを示現している。……

◇以下のようなことが主張されている。——

- (1)ブルジョアジーそのものの対抗は大したことはないが、習慣との力と小規模生産(農民、手工業者)の残存が、くりかえし資本主義を再生させている。習慣との力と小規模生産を絶滅するために、プロレタリア独裁が必要だ。
- (2)プロレタリアートの無条件の中央集権と厳格な規律が、習慣の力と小規模生産の絶滅するたかひにおいて必須である。ロシアでは、1917—1920年の戦時共産主義の中で、それを確立した。
- (3)階級の廃絶は、資本家と地主を追いだすだけでは決着しない。小商品生産者(農民、手工業者など)が、プロレタリアートを腐敗・墮落させる元凶である。小商品生産者は追いだせない、流血的・教育的・行政的な措置で長期にねばり強く闘争する必要がある。

▼「習慣の力」こそ商品関係・物象関係

◇ここに問題の核心が凝縮している。

・資本家や地主は追いだした。しかし、習慣の力や小商品生産が依然として抜きがたく存在している——この「習慣の力」こそ、商品関係・物象関係、〈私的諸労働を、物象的連関がシステムとなって、社会的な性格に転換する〉という物象のシステムのことだった。

しかし、レーニンは、つまりマルクス主義は、物象のシステムが支配しているという問題を把握しなかったし、商品関係は、党の主意主義的な力、国家の行政的な力をもつてすれば、一掃できると勘違いしてきた。

致命的な誤り。この流血的・教育的・行政的な措置で長期の強行こそ、レーニン主義＝スターリン主義の直接発生源。1917-1920年の過程で党とソヴィエトは決定的に変質した。

▼「5名の党中央→61万1000名の党员→400万以上の労働組合員というヒエラルキーが最高の団結形態」

■「共産主義内の左翼空論主義」1920年

【寡頭支配】

指導者—党—階級—大衆の相互関係、同時に労働組合にたいするプロレタリアートの独裁とプロレタリアートの党の関係は、具体的には、つぎのような形になっている。独裁を実現しているのは、ソヴィエトに組織されているプロレタリアートであり、このソヴィエトを指導しているのは、最近の党大会（1920年4月）の資料によれば、61万1000名の党员をもつ共産党（ポリシェヴィキ）である。……この党を指導しているのは、もっと小さな合議機関、すなわちいわゆる「オルグビュロー」（組織局）と「ポリトビュロー」（政治局）である。このビュローは、中央委会総会で選出され、5名の中央委員で構成される。だから、こうしてまったく正真正銘の「寡頭支配」が出てくるのである。……

党はその活動にあたって、労働組合を直接によりどころとしているが、労働組合は、……形のうえでは党に属しない400万以上の組合員をもっている。だが、事実上は、労働組合の大多数の指導機関、第一にいうまでもなく、全ロシア労働組合の中央部、すなわちビュロー（全ロシア労働組合中央評議会）の指導機関は、すべて共産党员からなっていて、党のすべての指令を実行している。このようにして、形式上は共産主義的でない、弾力性のある、比較的広い、きわめて強力な、プロレタリア的な機構が、大体にできており、党は、この機構によって階級と大衆とに緊密に結びつき、この機構によって、党の指導のもとに、階級の独裁が実現されている。

……

これが、「上から」見た、独裁を実際に実現するという立場からみた、プロレタリア国家権力の大体の仕組みである。ロシアのポリシェヴィキは、この仕組みを知っており、この仕組みが、小さな、非合法的な、地下サークルから25年のあいだに、どのように大きくなったかを見てきているので、彼ら「ロシアのポリシェヴィキ」にとっては、「上からか」それとも「下からか」、指導者の独裁かそれ

とも大衆の独裁かなどというおしやべり [ボリシェヴィキに対する内外の批判] が、左足と右手のどちらが人間の役に立つかという論争に類した……たわごととしかおもわざるをえない……。

……

◇最高の団結形態としての革命党

労働組合は、資本主義の発展の初期には、労働者が個々ばらばらで孤立無援な状態から階級的な団結の初歩へうつつっていく通路であったから、労働者階級の大きな進歩であった。プロレタリアの階級的団結の最高の形態、つまりプロレタリアートの革命的な党……が成長しはじめると、労働組合は、不可避免的に、いくらかの反動的な特徴、いくらかの同職組合的な狭さ、いくらかの非政治主義の傾き、いくらかの不活発などを、あらわしはじめた。だが、労働組合を通じるほかには、労働者階級の党と労働組合の相互作用を通じるほかには、世界中のどこでも、プロレタリアートの発達、生じなかったし、また生じることもできなかった。……労働組合は、プロレタリアがその独裁を実現するのに欠くことのできない「共産主義の学校」……。【『レーニン全集』31巻】

◇レーニンが、ロシアの共産党組織の系列を概括的に紹介している。

・5名の党中央⇒61万1000名の黨員⇒400万以上の労働組合員というヒエラルキーが最高の団結形態——これがプロレタリア独裁の実態である、としか読めない。

◇スターリンが、『レーニン主義の諸問題』（1926年）に中で、党から大衆への上意下達の指導・指令の系列を「伝導ベルト」と称したが、それはレーニンから発して共有された考えであった。

●レーニンの自己批判？

▼レーニン「大きな誤りを犯した、前進の道をふさいでしまった」（1922年）

◇「左翼空論主義」（1920年）は、ヨーロッパの共産主義運動を指導するために、コミンテルン第2回大会（1920年）に向けて出された。ヨーロッパの共産主義運動では、反議会・反労働組合という傾向をもった「左翼主義」が広がっていた。それにたいして、あらゆる傾向の労働運動の中で活動すべきということを提起する一方で、そのためにも、組織的には、プロレタリア独裁と、無条件の中央集権と厳格な規律という考え方で進むべきとし、これがコミンテルンの指導路線とされる。

◇しかし、現実に強い反発をくらって、レーニンは、2年後の第4回大会（1922年）で、「われわれはこの決議（前年1921年、「左翼空論主義」の指導路線にもとづく第3回大会の決議）で大きな誤りを犯してしまった、すなわち、われとわが手で、今後の前進の道をふさいでしまった」と自己批判。

▼「決議は実行されなくてはならない」

さらに、「この決議はあまりにロシア的であり、ロシアの経験を反映している。外国人からは理解されない」としつつも、しかし、「やはり理解される必要がある。……この決議は実行されなくてはならない」としている。

つまり、〈説明不足は謝るが、路線としては正しく、経験を積みばわかるから実行しろ〉と。

◇問題は、いいさかもつかまれていない。

・問題は、マルクス主義それ自体、資本主義社会における支配のあり方、物象のシステムを把握しないマルクス主義の問題。

・それが、ロシアでは、「習慣の力と小商品生産」絶滅闘争として強行され、他方で、ヨーロッパでは、反議会・反労働組合という傾向をもった「左翼主義」として現われた。いや、むしろ、反議会・反労働組合として現われた傾向の背景・根拠と格闘すべきだった。そして、「左翼主義」の多くが標榜する評議会運動・工場委員会運動に耳を傾けるべきだった。

●レーニンの言行を愚直に遂行したスターリン

▼スターリン「小商品生産者の絶滅戦を一時代にわたって遂行する」

■『レーニン主義の基礎』1924年

【レーニン主義とは】

.....

レーニン主義とはなにか？

...

レーニン主義は、穏和で非革命的になったといわれる後年のマルクス主義とはちがった、19世紀の[18] 40年代のマルクス主義の革命的な要素を復活させたものである、という人もある。…だが、これは一分の真理にすぎない。レーニン主義にかんする完全な真理は、レーニン主義がたんにマルクス主義を「第二インターナショナルの日和見主義者による骨抜き化から」復活させただけでなく、さらに一步前進して、資本主義とプロレタリアートとの新しい諸条件のもとで、マルクス主義をいっそう発展させた、という点にある。

では、結局のところ、レーニン主義とはなにか？

レーニン主義は、帝国主義とプロレタリア革命の時代のマルクス主義である。もっと正確にいえば、レーニン主義は、一般的にはプロレタリア革命の理論と戦術であり、特殊的にはプロレタリア独裁の理論と戦術である。

...

普通、レーニン主義のとくに戦闘的で、とくに革命的な性質が指摘されている。…レーニン主義のこの特質は、二つの理由によって説明される。すなわち、第一には、レーニン主義がプロレタリア革命の中からうまれてきたので、この革命の特色をそなえざるをえないということ、第二には、レーニン主義は、第二インターナショナル日和見主義とたたかいながら成長し、つよくなった、そして、この日和見主義との闘争は資本主義との闘争に成功するために欠くことのできない前提条件であった

し、またいまもそうである…。一方で、マルクス＝エンゲルスと、他方ではレーニンとのあいだには、第二インターナショナルの日和見主義が独占的に支配していた一個の時代があって、この日和見主義と容赦なくたたかうことは、レーニン主義のもっとも重要な任務の一つとならざるをえなかった…

…。

……
【プロ独は歴史上の一個の時代】

〔スターリンのプロ独に関する言及は、レーニン『背教者カウツキー』および『左翼空論主義』の上記引用部分の整理・リフレインでほぼ尽きており、重複するので大幅に省略。なお次の点がスターリン独自の強調点〕

レーニンはこう言っている、……「小規模生産は……資本主義とブルジョアジーとをたえず……大量にうみだしている……」「階級を絶滅することは、地主や資本家を駆逐することだけではない……、小商品生産者を絶滅することを意味する……」……「……流血のまた無血の、暴力的または平和的な、軍事的または経済的な、教育的なまたは行政的な闘争である」

これらの任務を短い期間に遂行し、こうしたことを数年間になしとげえないことは、証明するまでもない。だから、プロレタリアートの独裁……は、……ほんの瞬間的な時期とみるべきではなく……歴史上の一個の時代と見なければならない。

◇実は、スターリンについては、レーニンの言説にたいしてほとんど新しい内容を付け加えていない。レーニン『背教者カウツキー』および『左翼空論主義』の上記引用部分の整理・リフレインでほぼ尽きている。

・レーニンの言行を、レーニン主義として、愚直に継承・遂行したのがスターリンであり、それが、スターリン主義であったというべきであろう。

◇なお、引用部分で、スターリン独自の強調点は、

・「小商品生産者の絶滅戦を一時代にわたって遂行する」という点である。

【VI】 もう一つの道：アソシエーション

●「存立する矛盾」という把握がカギ → [IV]

●マルクス主義～レーニン主義～スターリン主義とは違う流れがあった・ある！

▼マルクス『資本論』（第1巻初版 1867年）

- ・資本主義＝物象のシステム
- ・現代の矛盾した存立構造の中に、アソシエーションが対立的に形成されている。
- ・物象のシステムにたいして、アソシエーション＝人間のシステム

▼マルクスと第一インターナショナル

◇「国際労働者協会創立宣言」

◇「インターナショナル・個別問題に関する暫定中央評議会代議員への指針」(1866年)

- 一) 略 二) 協会の支援による労資間闘争における国際的統一 三) 労働日の制限
- 四) 幼少者・児童(男女)の労働 五) 協同労働 六) 労働組合。その過去、現在、未来 七) 直接税と間接税 八) 国際的信用 九) ポーランド問題 十) 十一) 略

▼ロシア革命期のもう一つの運動

◇ロシア革命期の工場委員会運動＝もう一つのロシア革命

- ・「1917年の社会運動」
- ・「1917年運動とロシア革命との方向性における決定的対立」
- ・「地方自決的・無政府主義的・遠心的にみえる運動」

——辻義昌『ロシア革命と労使関係の展開』(1981年)

◇トリノ工場代表委員総会「職場代表委員綱領」(1919年)

- ・グラムシを中心に執筆
- ・労働組合と工場代表委員

●なぜ様々な挑戦が失敗したのか？なぜ再び社会運動の時代といえるのか？

	19C	20C	21C
資本主義の区分	自由主義	ケインズ主義	新自由主義 グローバリズム
国家の種別	夜警国家	福祉国家	福祉国家解体
コモンの伸縮	国家・資本がコモンの放逐	国家・資本がコモンの吸収・制度化	国家・資本がコモンを放棄
社会運動の盛衰	協同組合 ×労働組合	工場委員会 社会運動の 後退	新たな社会運動の 隆盛

▼コモンとアソシエーション

◇コモンとは、社会的なもの。生産・分配・消費の社会的な連関、生産諸条件、社会的インフラ。コモンの管理・運営をめぐる、共同組合などの社会運動が活動する。

◇アソシエーションは、資本主義の矛盾した存立構造の中に対立的に形成されているが、それが、具体的に、析出・顕在化したものがコモン

▼21世紀の展望

・19世紀後半：自由主義・夜警国家の下で、コモンにたいする死活的な要求・取り組みが沸き起こる。

・20世紀：ケインズ主義・福祉国家・フォードイズムの下で、広がったコモンを国家・資本が吸収・制度化、社会運動としては後退

・21世紀：新自由主義・福祉国家解体・グローバル化の下で、国家・資本が吸収・制度化していたコモンを放出、それをめぐって再び死活的な要求・取り組みが起こっている。社会運動が隆盛するしかない⁶。

⁶ 例えば、トランプ支持者の問題や「都構想」をめぐる問題を考える上でも、まさにコモンの解体か再生かという問題としてとらえたときに、大きな展望を語ることができる。

■ 参考文献

- ・廣松渉・片岡啓治編『マルクス主義革命論史1 マルクス・エンゲルスの革命論』
- ・山本統敏編『マルクス主義革命論史2 第二インターの革命論争』
- ・中村丈夫編『マルクス主義革命論史3 第三インターとヨーロッパ革命』
- ・平子友長『社会主義と現代世界』
- ・太田仁樹『論戦 マルクス主義理論史研究』
- ・太田仁樹「変革主体から見たマルクスの革命論とマルクス主義の革命論」岡山大学経済学会雑誌 2019
- ・有井行夫・長島隆編『現代認識とヘーゲル＝マルクス』
同 榊原宏「マルクス主義の認識主義的展開」
- ・大谷禎之介『社会経済学』
- ・ミヒャエル・ハインリッヒ『「資本論」の新しい読み方 21世紀のマルクス入門』

●紹介：ハインリッヒ『「資本論」の新しい読み方』

◆著者 M.ハインリッヒ【訳者あとがきより】

・1957年生まれ。ベルリン技術経済大学教授、左派理論雑誌『PLOKLA』編集委員。『資本論』研究の専門家としてドイツで最も知られた人物の1人。

・ベルリンにあるローザ・ルクセンブルク財団のビルの一室で、年間を通じて毎週2回、『資本論』読書会が開かれている。10~40名程度の老若男女が参加、夜の約2時間、活発に討論。節目ごとにゲスト講演が行われ、そこによく招かれるのがハインリッヒ氏。氏の講演の際は、100名以上が聴講。

(なお訳者は、佐々木隆治、斉藤幸平など)

◇現代ドイツでの『資本論』

・「新しい読み方」とは、「物象化論として『資本論』を読む」という意味。本稿が強く主張する視角であるが、それが全体を貫いている。

・ドイツでは、1960年代から、マルクス主義の伝統的な読み方にたいして、この「新しい読み方」が始まり、広がってきているという。

・上の「訳者あとがき」の引用からも垣間見えるように、「新しい読み方」がかなり大衆的に行われているようだ。それを反映してであろう、本書の筆致も極めて平明で現場論議に即しているように感じる。

・これがドイツの大衆運動・社会運動の思想的背景になっているのではと想像する。

◇翻って日本では

・『資本論』やマルクスを扱う論者が希少化しているが、むしろ問題なのは、残存する極少数の左派活動家の多くが、依然として、マルクス主義の伝統的な枠組みに自縛したまま議論している点だ。あるいは、せいぜい伝統的マルクス主義×現代思想の接ぎ木という塩梅だ。

・これでは、現代社会を把握できないし、マルクス主義・レーニン主義・スターリン主義の呪縛から解放されない。当然、広範な人びとには受け入れられようもない。日本の運動の問題点をなしていると感じる。

・是非、ハインリッヒ『「資本論」の新しい読み方』を検討してほしい。 (了)